

新産経

平成26年(2014) 日刊J25579号
3|3[月]
産業経新新聞(ザンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ①産業経新新聞東京本社2014
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
②東京(03)3231-7111 (大代表)

平成 26 年 (2014 年) 3 月 3 日 月曜日 12 版

仙台空港を間近にのぞむ宮城名取市下増田。約6千平方メートルの畑に、高さ約20センチの苗木が並ぶ。種を植えてから今月で2年。成木になるまで、まだ30年かかる。

小さなツツの苗木に託された使命は大きい。育った苗木は5月、同市の沿岸部約100センチに移植され、東日本大震災で壊滅した海岸林として育てられる。

「この畑で、10年間で50万本の苗木を育てます」。海岸林再生プロジェクトの現場を統括する林業技術師の佐々木広

一さん(63)が、説明してくれる。「乾いた寒風の吹く名取市の沿岸は、木には過酷な環境。多くが枯れることも予想されるので、気が抜けません」と、顔を引き締めた。

林野庁によると、震災では青森から千葉までの海岸林は約3660センチが倒木や浸水などの被害を受けた。そのうち約1753センチが宮城県内だった。

世界各地で緑化活動を展開する公益財団法人「オイスカ」(東京)の吉田俊通さん(44)は震災から2日後、津波で壊滅した海岸林の再生に動

海岸林再生プロジェクト

き出した。平成23年5月に、名取市を現地視察した。成長に長い年月を要する木は、少しでも早く植えたほうがいから

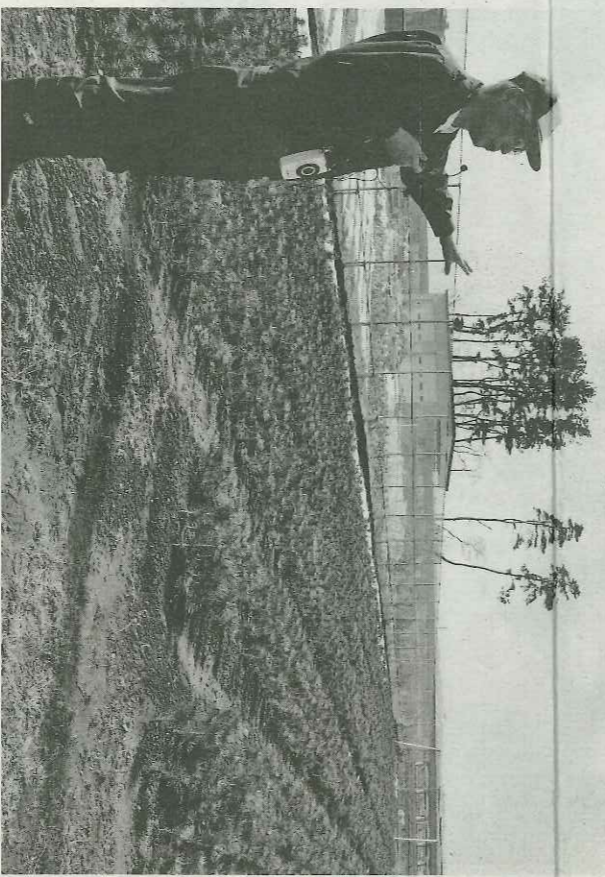
同市の海岸林のほとんどはクロマツだった。水を求めて地下3メートルの深さまで根を縦横

「あわただしく深く根を張るクロマツが、なぜこんなに簡単に倒れるため、倒れにくい。調査の経果、海岸林の場所は地味な調査されたのか」。現地調査の生活で途方に暮れていた

「苗木を育てる鈴木英二さん(72)は当時を振り返る。「悪夢のような出来事が起き、日々の生活で途方に暮れていた

鈴木さんには特別な思いがある。津波で周囲の家屋が流された中、鈴木さんの自宅は

ていたため横にも広がっていた。根が深く、密集して



再生海岸林の育成状況を説明する佐々木広一さん(左)とプロジェクトメンバー

なかつたことが分かった。「土地を、3センチ上げれば、頑丈な海岸林を再生できる」。そう確信した吉田さん(34)は佳良らの協力を求め、避

受け、同年11月に資格を取得。現在34人の被災農家が、鈴木会長らは育苗の講座を増やしていった。

鈴木会長は「東京五輪までには植栽を終え、名取市民の森として大切に守ってきたい」と、被災地の将来を思い描く。

宮城県の海岸林の歴史は約400年前にさかのぼる。江戸時代、仙台藩主の伊達政宗は農業振興のため、石巻市

は明治時代に森林伐採が進み、戦中に荒廃したが、戦後に佳良らの植林で再生したとい

同市広浦の葦が覆い変わる原には、戦後、海岸林の再生に尽力した人の名前が記された「愛林碑」が建つ。「名取市海岸林再生の空」メンバーの祖父の名前も記されている。

吉田さんは「再生には何十年もの月日がかかるが、孫の代やその先に立派な海岸林を残したいという気持ちで取り組んでいる」と話す。将来の市民を守る森づくりの計画は、始まったばかりだ。(安藤恭美、写真)